

面

119

真 心

池 田 澄 子

去年よりも草臥れますの雲の峰
めまといや昨夜を昔と思うとき
その顎は相当怒っている索麵
大雑把に言えば猛暑や敗戦日
踏み台に乗り白靴を蔵いけり
真心は水っぽいかも夕顔垣
吊忍するべきことはしたくなく
桃を剥く手を見られて友の家
白菊黄菊人数分のかなしみの
書き溜めて夜長つまらぬものばかり

スマホ撮り

衣 斐 ち づ 子

生きてますあのでこのてとほうれん草
山里に聞き込み捜査春きざす
むりやりのおどりぐいとは写楽顔
推敲の果ての一句や沖繩忌
マイナンバー廃屋めぐる黒揚羽
頭から鮎の串焼き食む女
夫宛にとどく白桃日曜日
スマホ撮りおがみぐせなる生身魂
鯛焼きを半分に切る敬老日
昼下り冬眠の蛇見てしまおう

水中花

奥名房子

飼ふごとく水替へてをり水中花
梅雨前線トーストにジャム厚くして
縁日の金魚は元気朝支度
盆参り一人のコメを研ぎて出づ
ふる里は自転車自転車月見草
廃屋や柘榴のかつと割るるまま
酸い顔をして爪たつる夏みかん
秋の夜の寺堂に落語研究会
二階より亡き母の声青葉木菟
夜語りの父の青春春炬燵

百物語

岡 田 一 夫

夕河岸や水生きいきと簀を超ゆる
線香の灰のまま立つ麦の秋
螢籠字引の傍に置かれたる
瀧落ちて山迫り上がる心太
拳骨に毛の生えてゐる団扇かな
百物語台所へときどきゆく
母無くて金魚の傍にねまるなり
笛の衆睫毛に霧を乗せてをり
老人の頭の中で桃傷む
いなびかり聖書に絡む栞紐

秋の旅人

福 田 葉 子

伯 爵 領 訪 う に 夏 草 深 く し て
捨 て 船 の 秋 夕 焼 け に 染 ま り いる
稲 つ る び 天 地 に 深 き 傷 走 る
戦 前 の 家 二 、 三 軒 路 地 の 秋
残 る 蚊 を 打 ち て 虚 し き 両 掌 か な
散 る も の の な べ て 眩 し き 黄 落 期
風 に な り た き 旅 人 紅 葉 山
老 人 の 何 か 喚 き て す す き 原
石 路 の 花 逢 わ ね ば い つ か 遠 い 人
冬 涛 の 退 く 一 瞬 の 静 寂 か な

暗 渠

高 橋 龍

夏みかん世迷言をば書く梵語
一冊の夏と阿部完市は言ふ
アオザイへ忍ばせる手も紫黄の忌
空あります二百十日の駐車場
磐座に目覚め勝ちなる秋の蛇ひ
コンテナへ詰込む理屈良夜かな
末枯や新興俳句暗渠となる
永遠に悲愴の父は栗を剥く
枯木中美事な美人現はれる
特攻もトイレも一步前へ出よ